いとうたの
ちとせ
ながら

明らかに
水
の
月
を
見
て
心
澄
み

天満宮の
川の
みそぎ

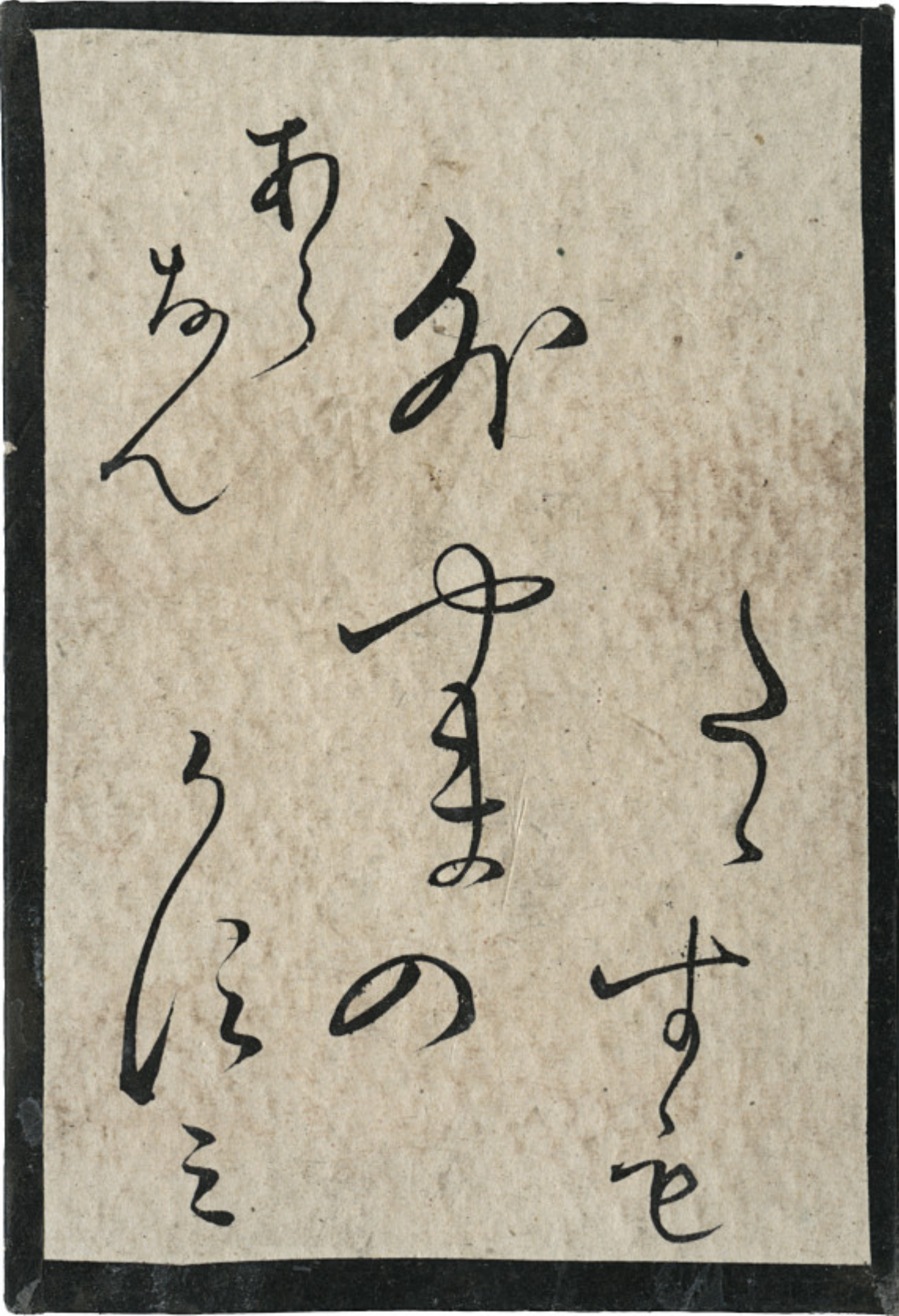
御書寺

花

名
所
こゝ
元
なり
ゆ
まて

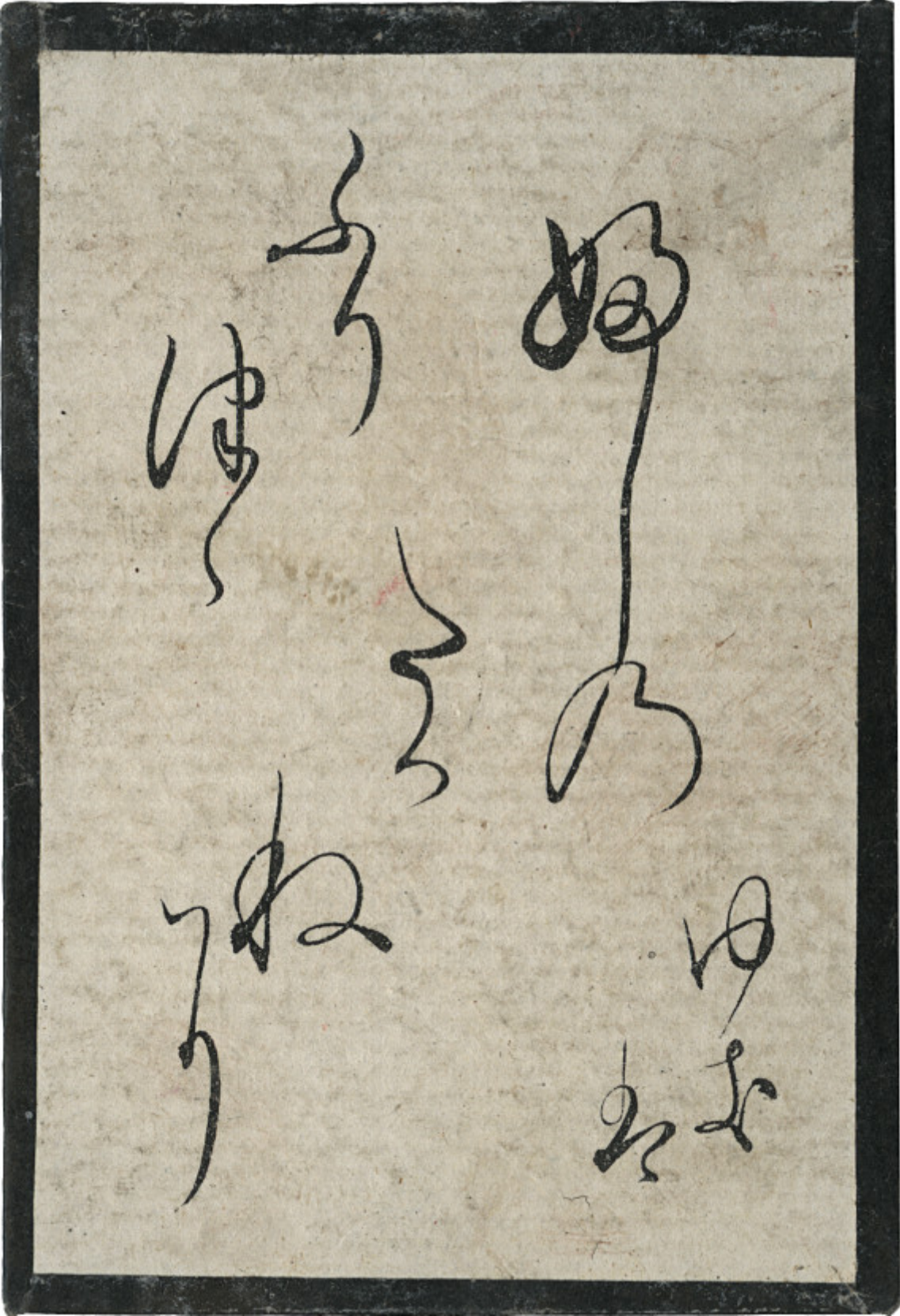
八陣之要書
知敵制勝の

寿舞
松
竹
梅

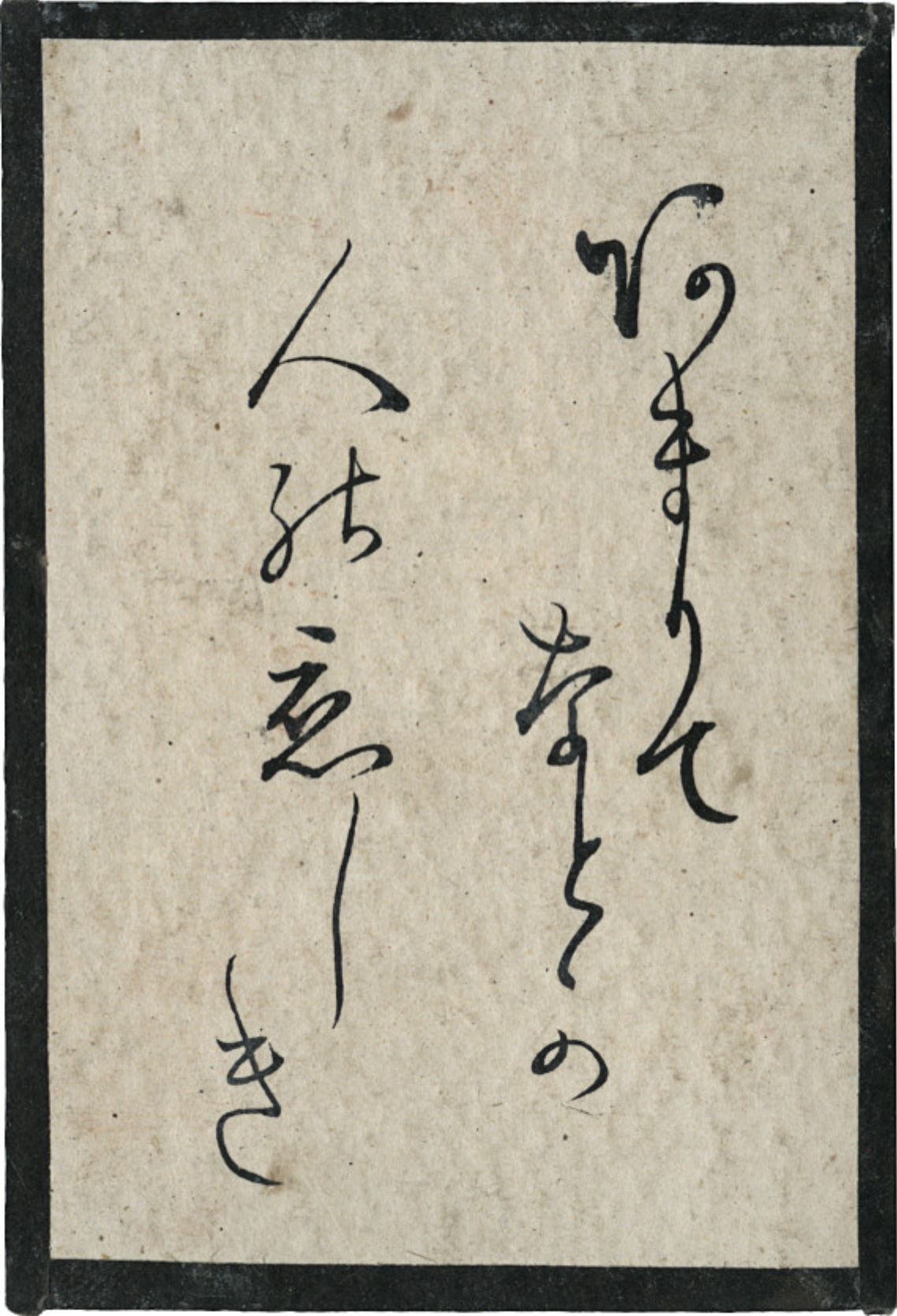


八雲
立つる
夢
ちらん

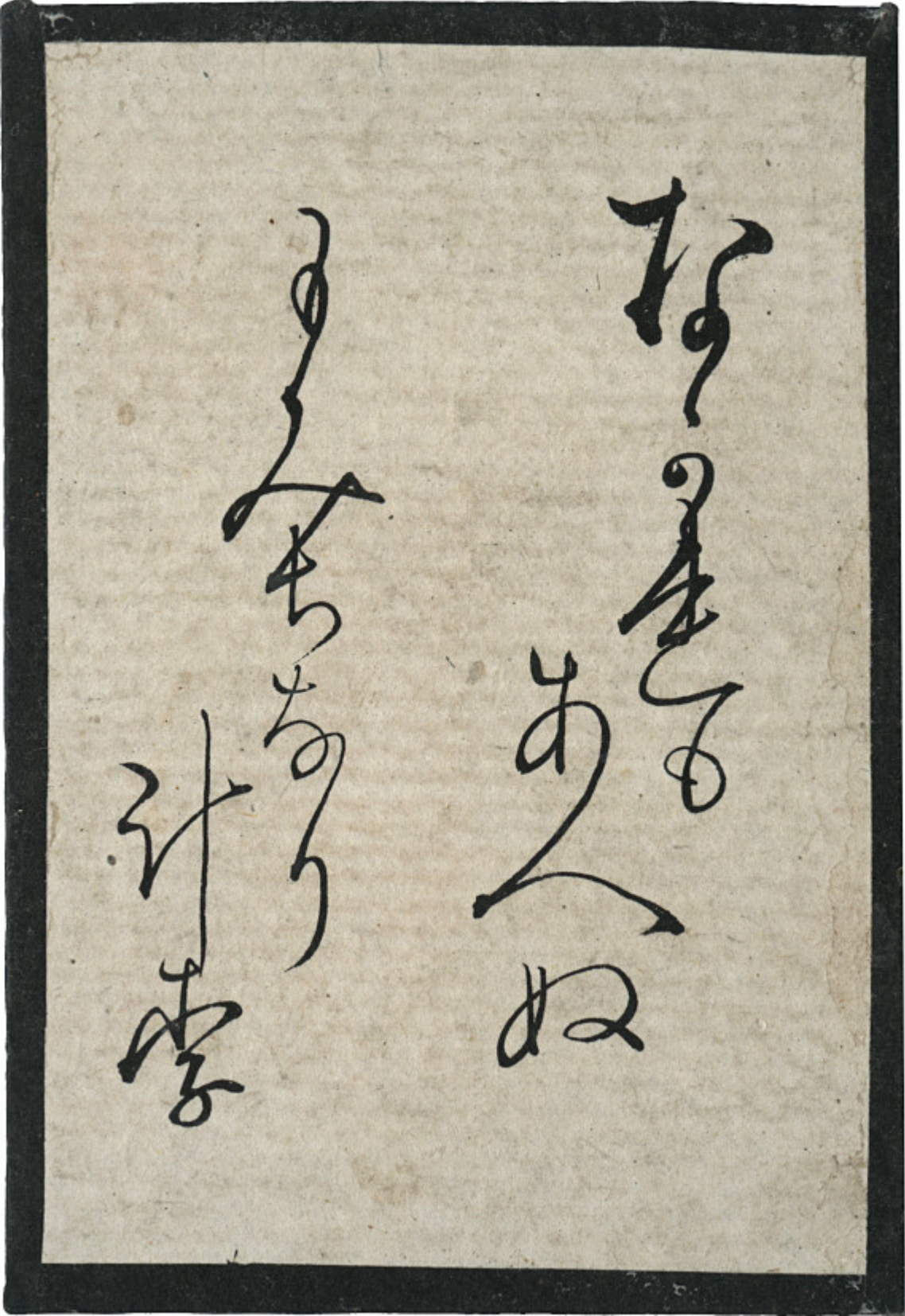
すまの
あらまつ
のそき
松風



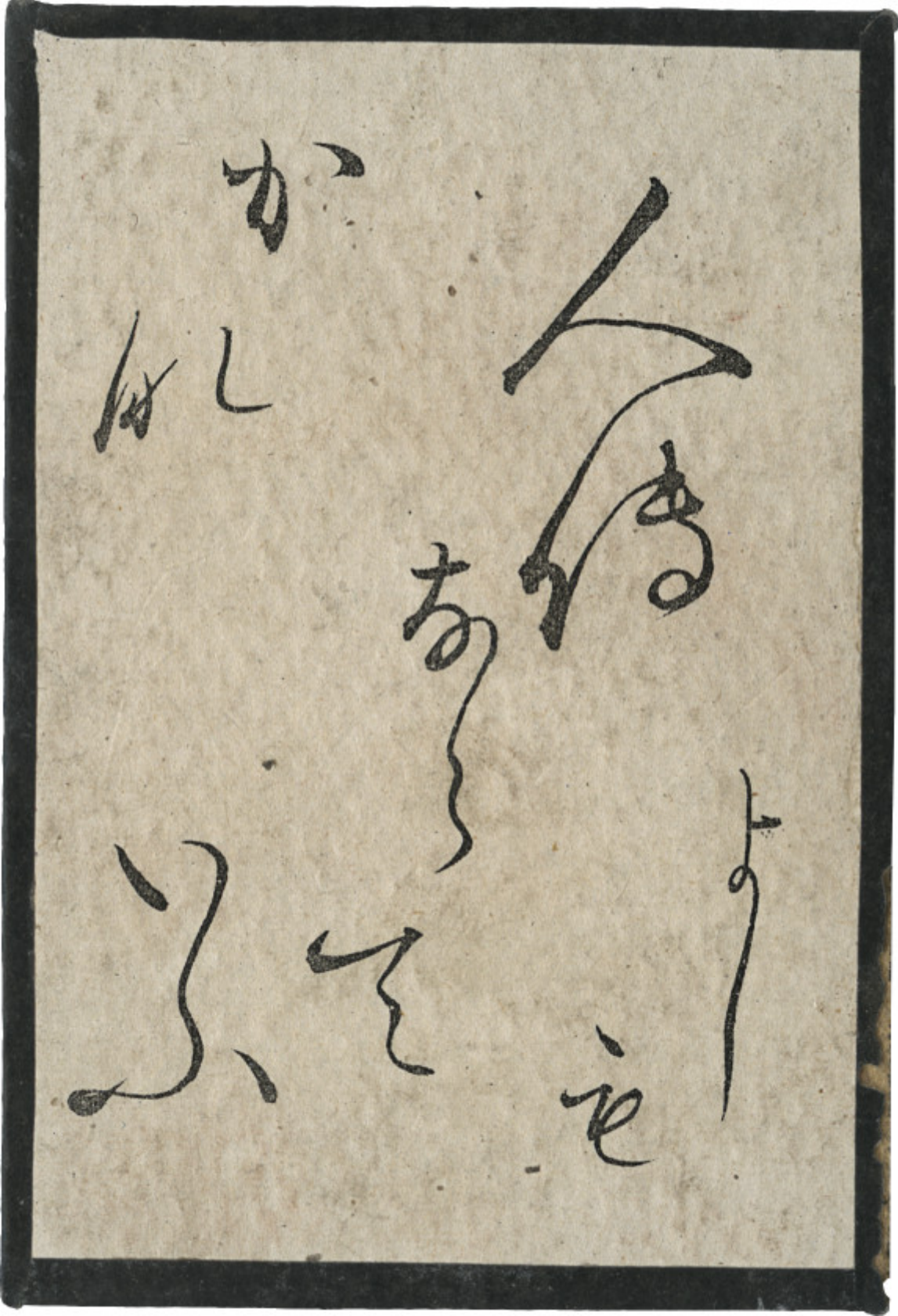
東京
明治
九年
四月

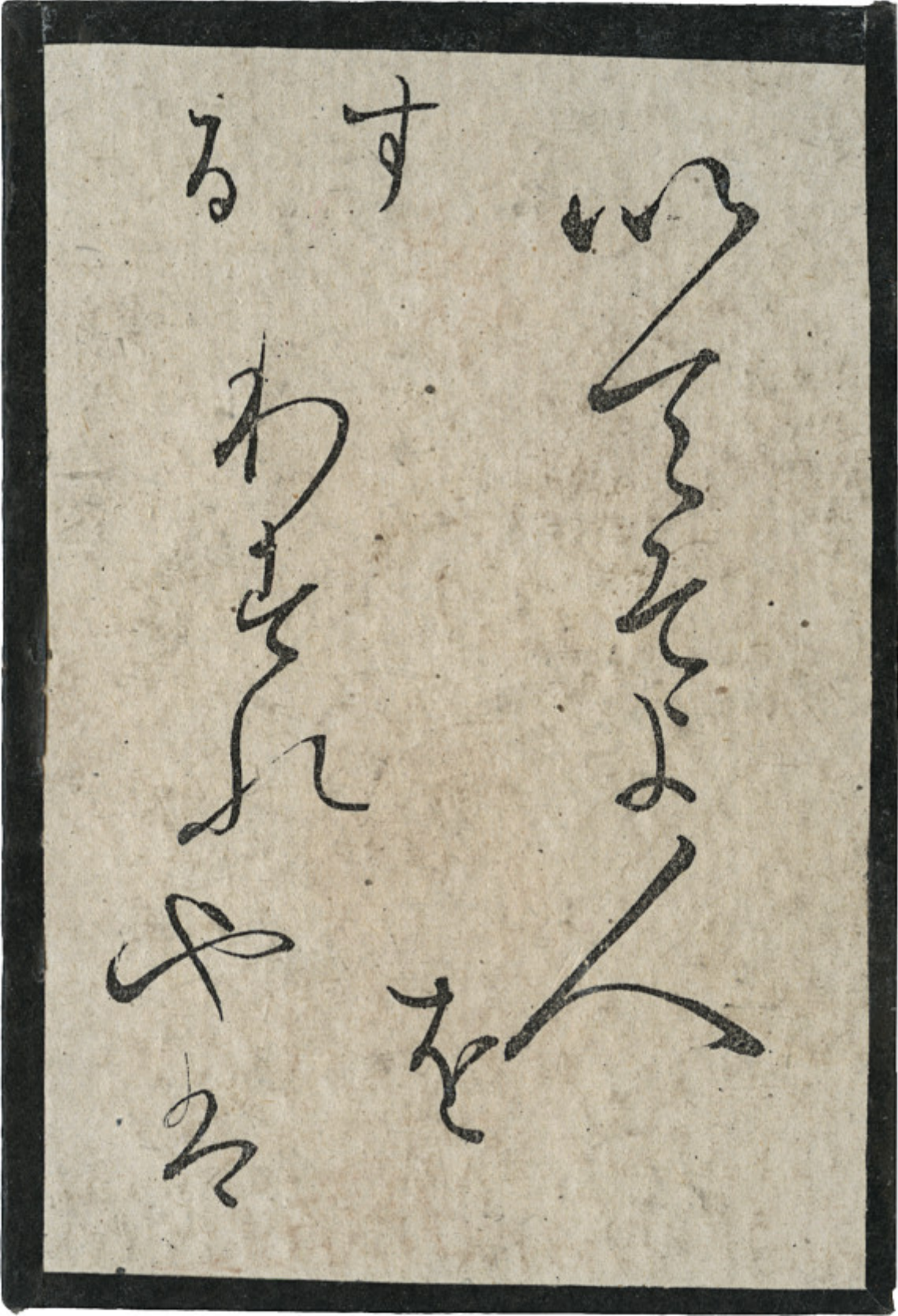


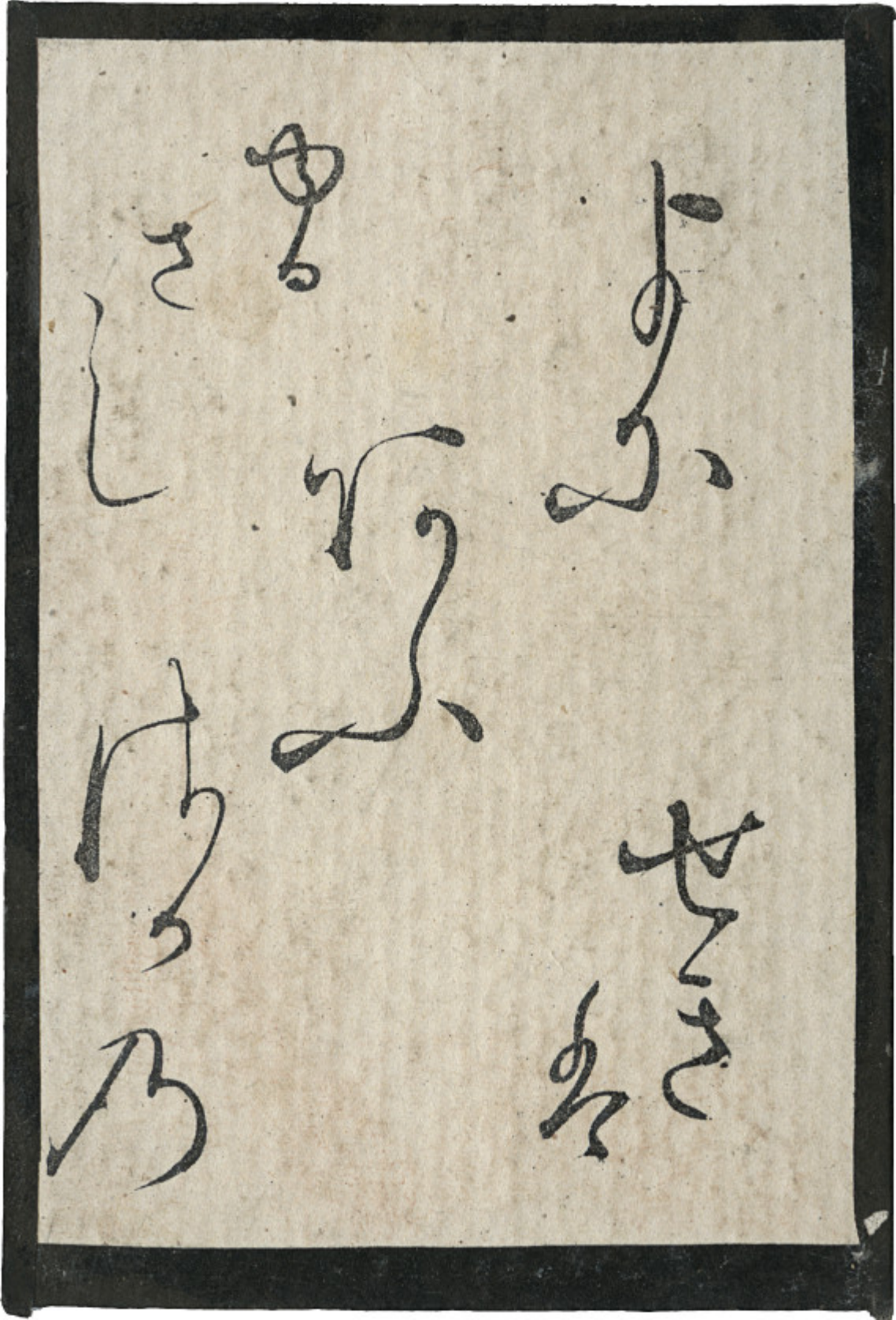
人の
[illegible]
乃
[illegible]
[illegible]



今歲之秋
始為學
計學


かはし

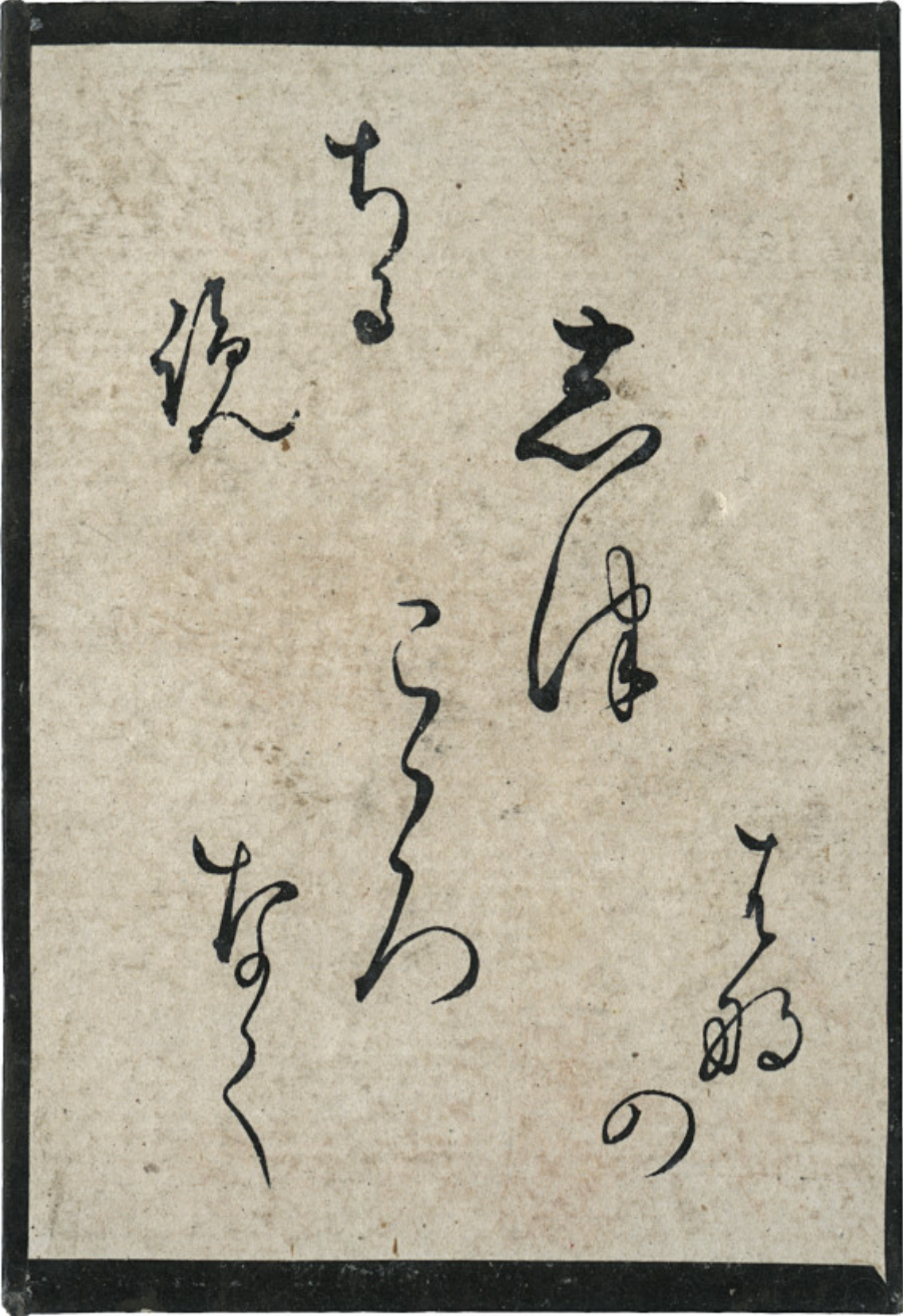




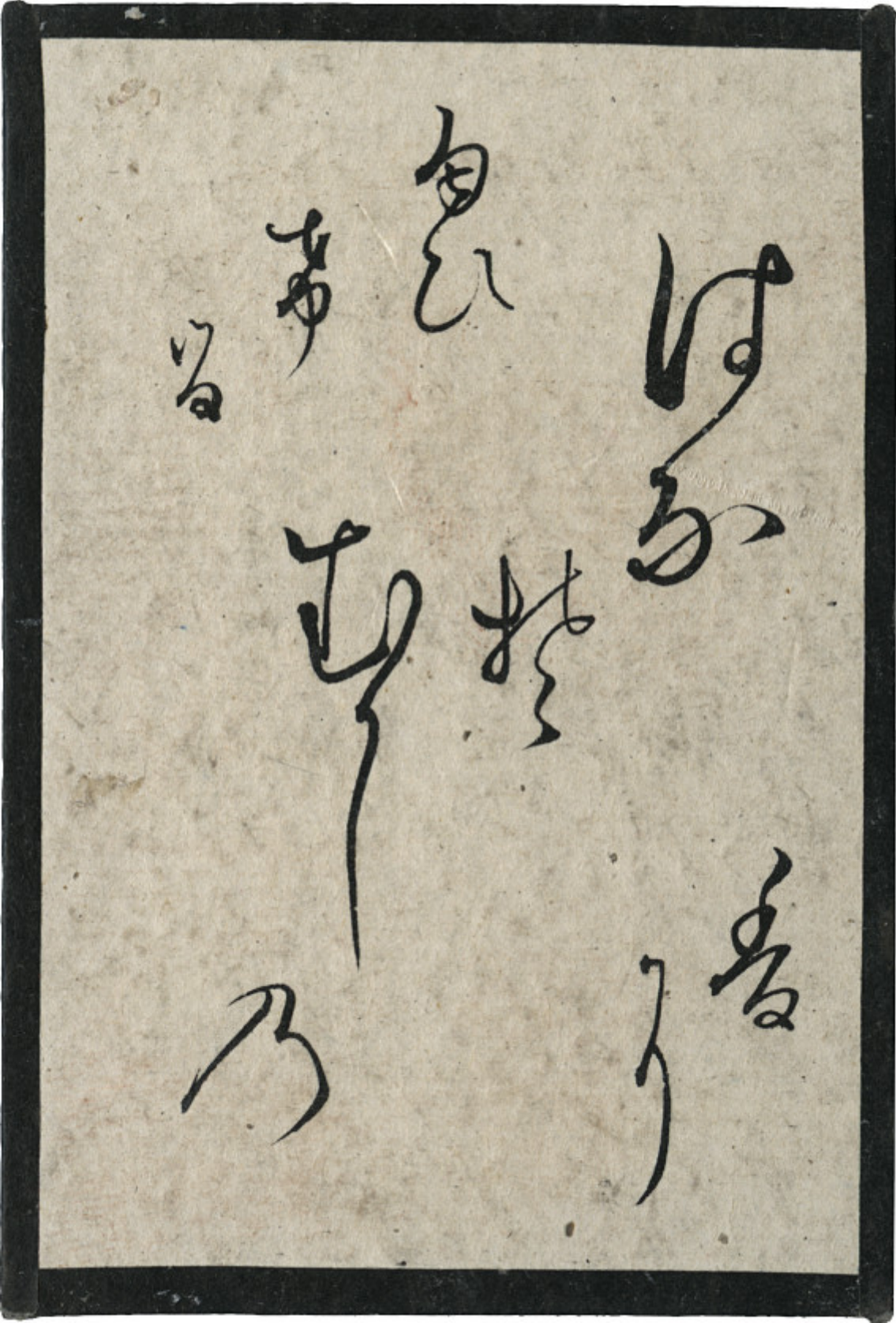
意氣揚揚
名譽於

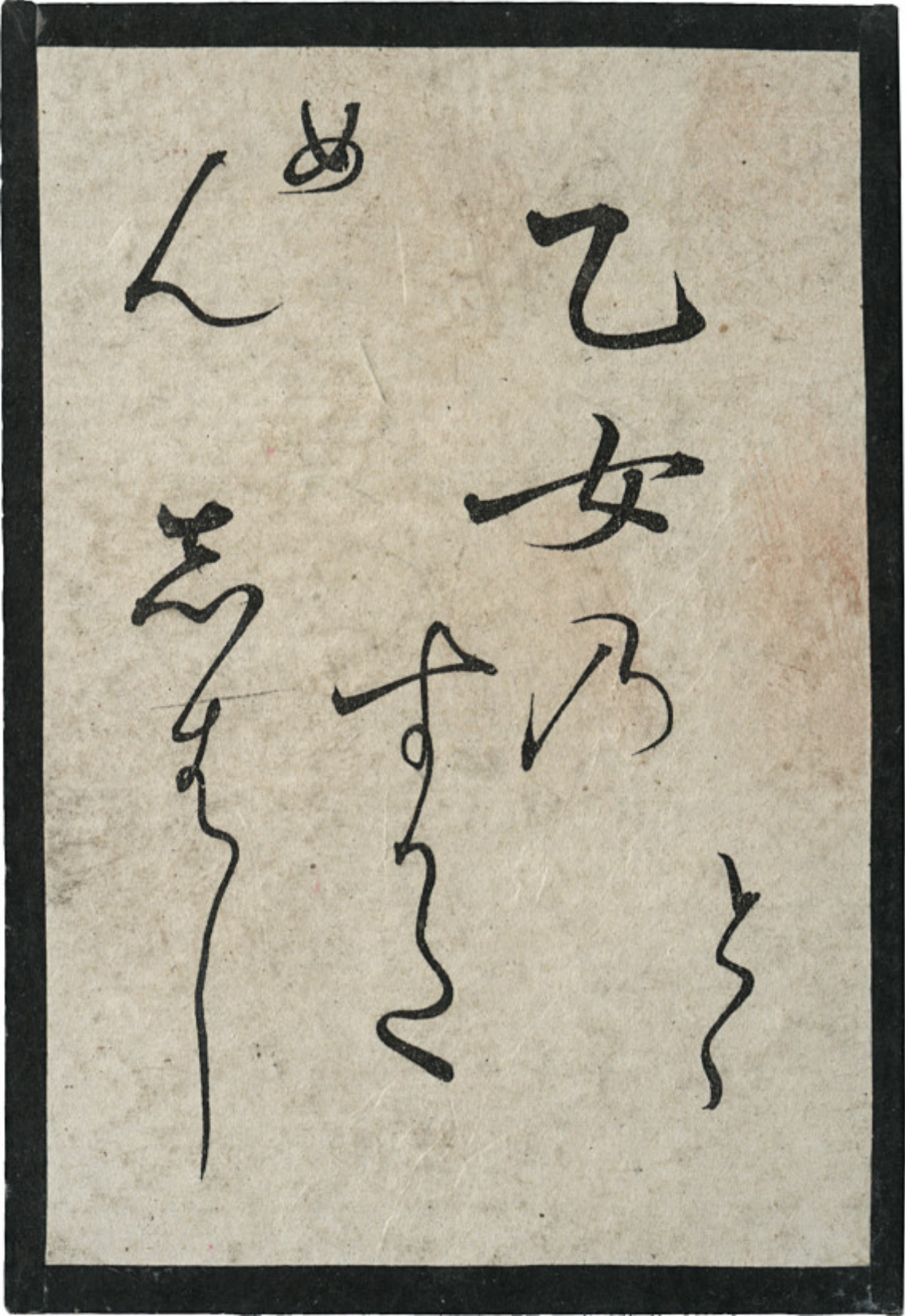
山の奥

身



人の
来ぬ
まを
待ち
あり
と



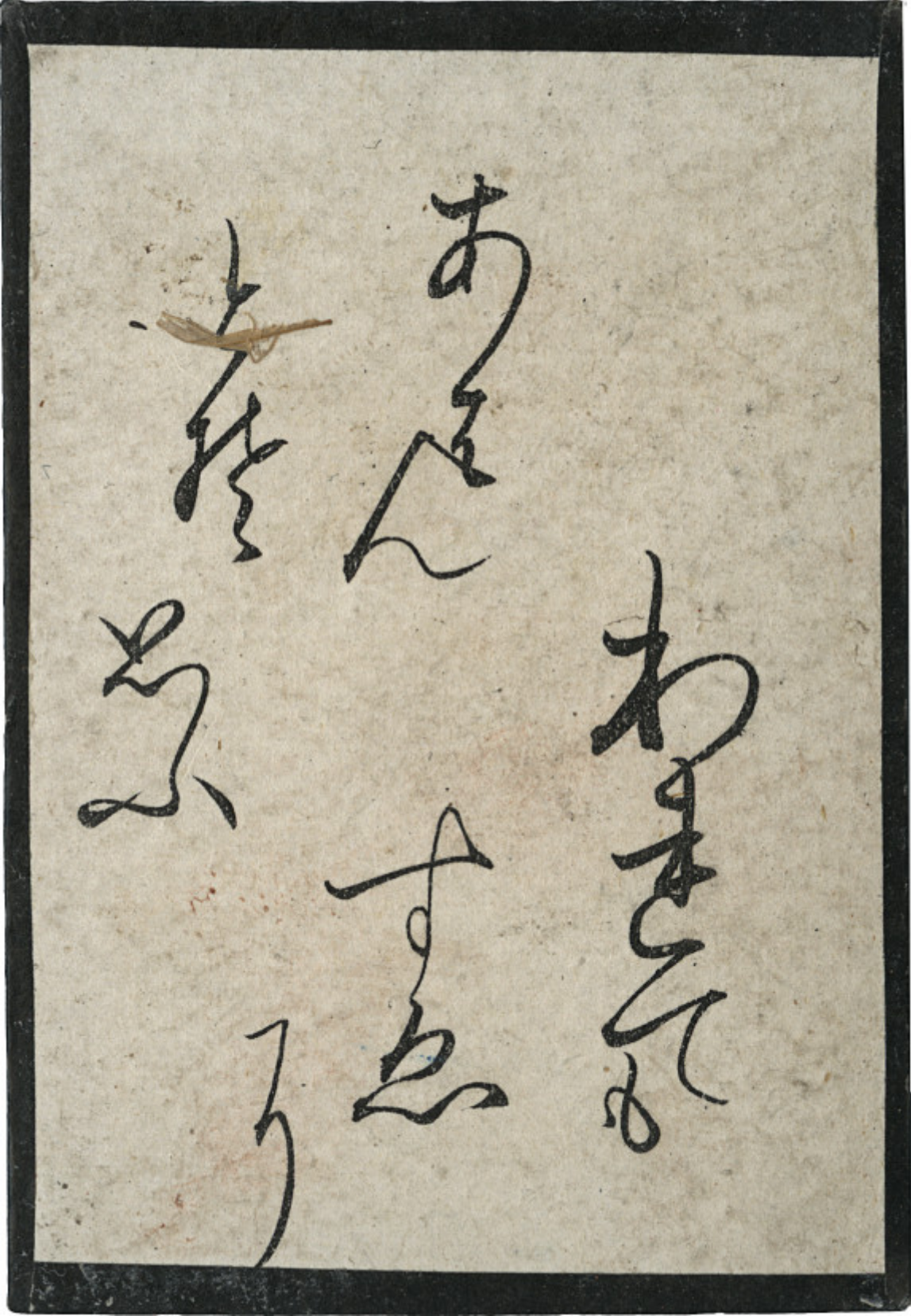


せし

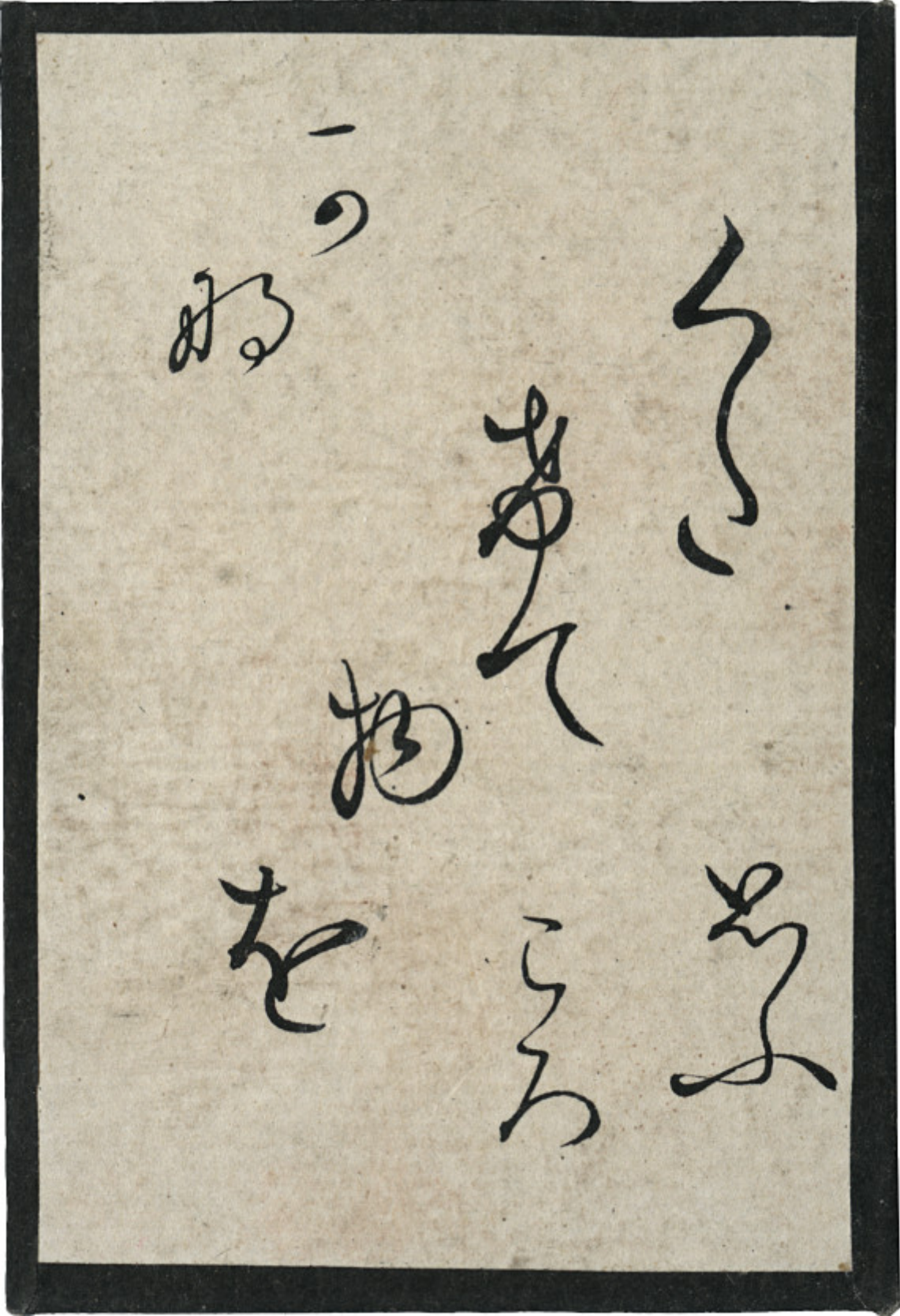
ふるる

まに

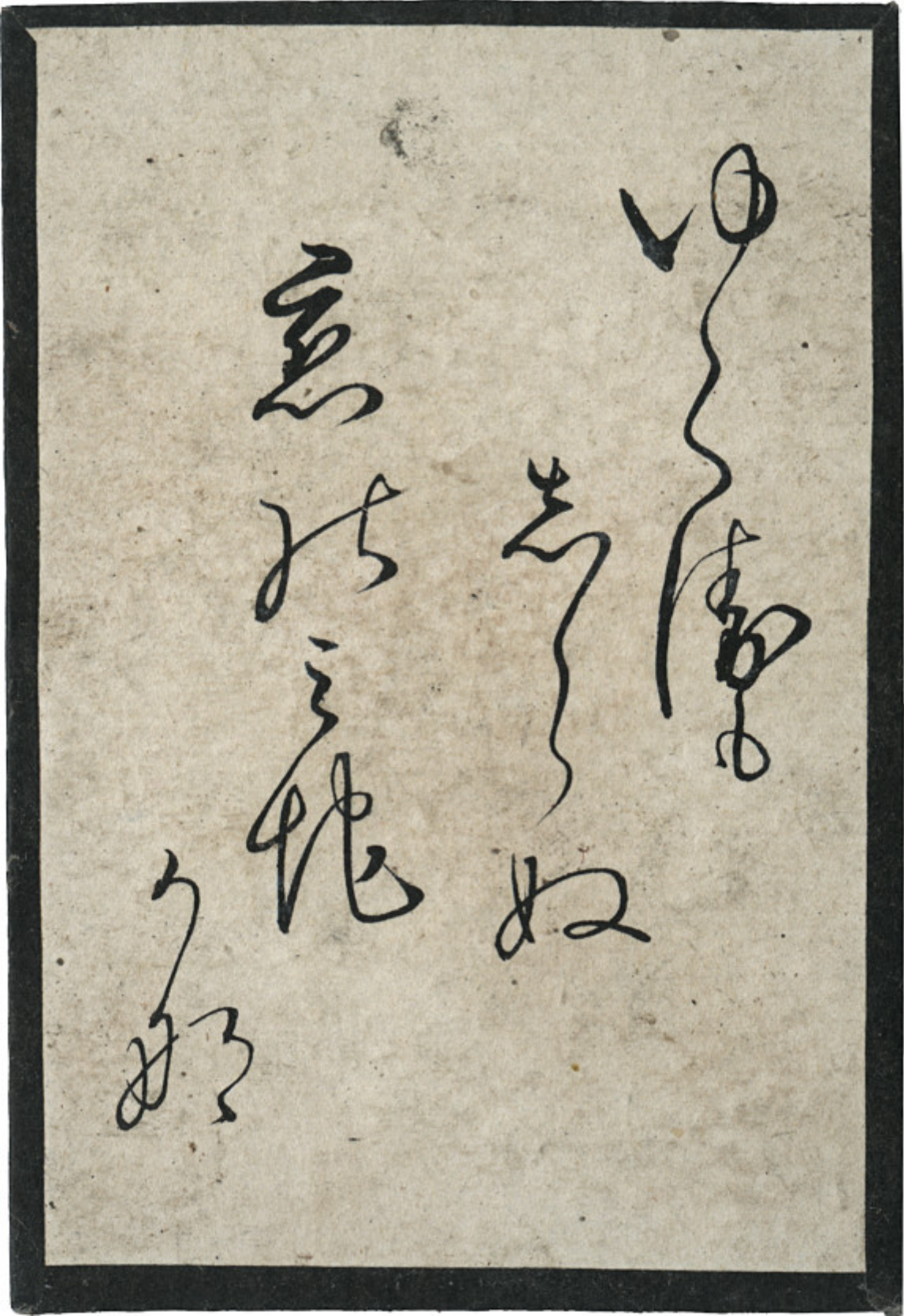
ものめ

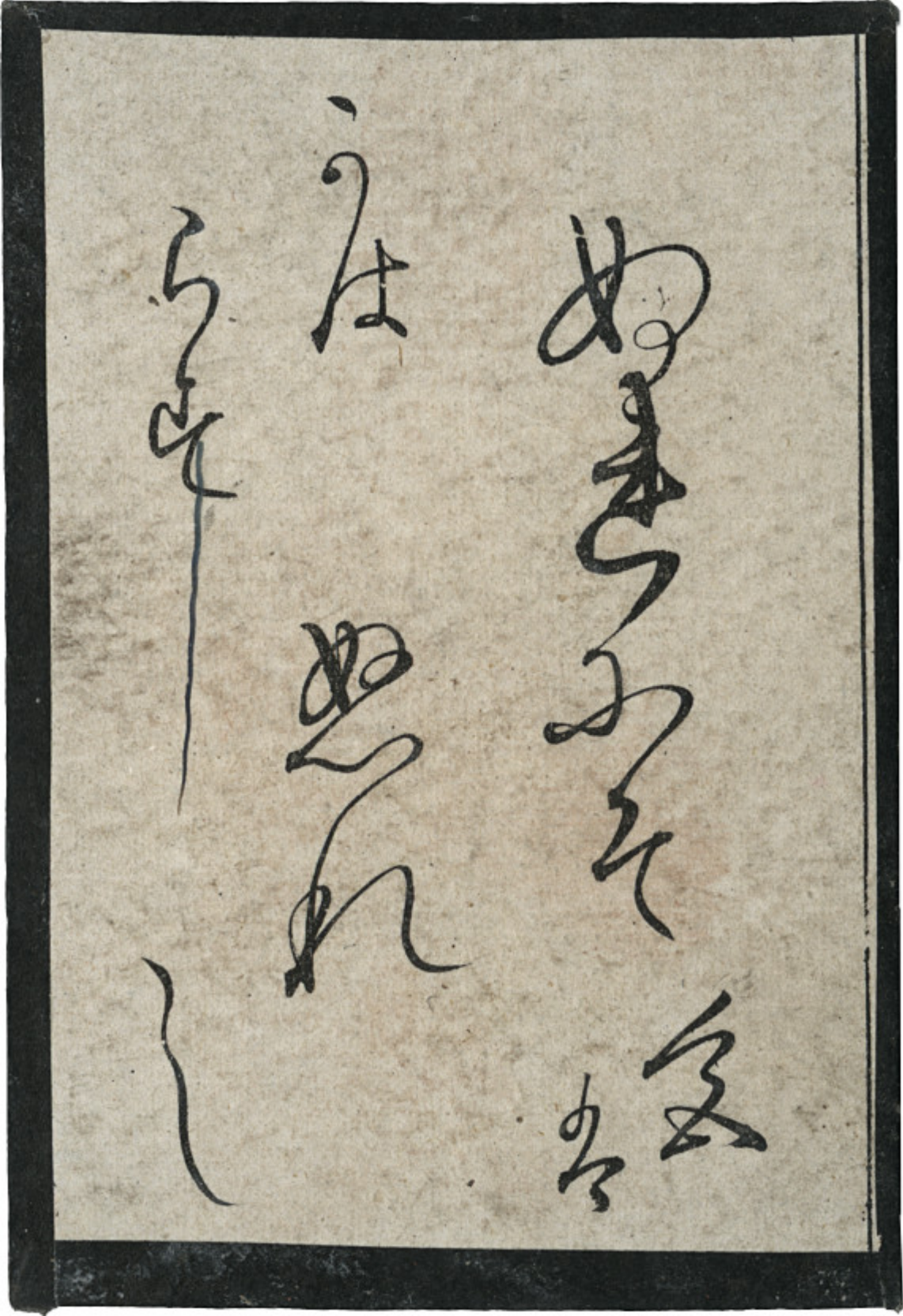


今
ひとまる
あふ
たむの
不
物



かたくを
まもれ
の





藤原義孝

清原元輔
ちきりきな
かたみに袖を
しぼるとは
末の松山
波こさじとは

相模

小野小町

袖子内親王歌絵伴
音ふきくる
ゆの
あぐ沼ハ
ゆ袖乃
ぬまも社もれ

小式部内侍

大江山
いくのの道の
遠くて
まだふみも
見ぬ
天の橋立

大貳三位

有馬山ゐなかの
さゝゐ
風ふけばいでそよ人を
忘るゝと

壬生忠岑
夜明のつきを
なくみえ
別をよりて
あかつきだにも
うらぬるかな

入唐の大使大臣

赤染衛門

風もたちぬべ
寝ぬまの
袖にさやけ
かくばかりまでも
月をみるかな

菅家

はなとみるへ
ぬさもあへず
ぞくを向山
紅葉をおりき
神のまにまに

前大納言匡房

高砂の尾上の
桜咲にけり
外山の霞
たつなむ

紀友則

久かたの
光のけ
しき
春の日に
花しづ心
なくも
散るらん

源後頼朝卿

中納言家持

かくてのみ
ありなば
ものの
あはれも
しらじとや
ひとりぬれば
夜ぞ
ふけにける

待賢門院堀河

たゆたゆとなびく
かみもたれば
つまぶかきの
ぐしてくしけづる
物ぬぎ掛へ

柿本人麿

あしひきの山鳥の尾のしだり尾の
長々しよを我
ひとりかも寝む

伊勢大輔

古へ乃奈ら良
ならの都の
八重さくら
けふ九重に
匂ひぬるかな

安倍仲麿

大和の国なる
三笠山
出しかの月

天智天皇

秋の田の
かりほの
庵の苫を
あらみ
我こそ
袖は
露に濡れ
ぬれつゝ

持統天皇

春すぎて夏きたるらし白たへの
衣ほしたり
てふ
天の
かぐ山

前大僧正慈圓

わたのはらこぎいでぬと人はみる
海人のつりぶね

秋の夕暮

精丸たま
奥山ふかく
ふる分
なく麻乃
夢きくとも
秋はかなしき

山色赤人
田子の浦ゆ
うち出でて
白妙の
富士の高根に
雪は降りける

右近

武子内親王
玉のをよ
絶ばあらばぬ
なほ
ながらへバ
忍ぶることの
よわりもぞする

元良親王

河原左大臣

みちのくの
しのぶもぢ
ずり
誰ゆへに
乱れそめしか
我なら
なくに

頼念右大臣
よの中ハ
みてかりる
なきさはく
あまのゝ小舟
つちくく
かるゝ

源兼昌

淡路路ちかうよる
なみのかよひにて
いくよねさめぬ
すまの関もり

後鳥羽院御製

きりぎすなく

中納言朝忠

陽成院

筑波根の
峯より
かなる
みなの川
恋ぞつもりて
淵となりぬる

三條右大臣
名にしおはばあふさかの山のさねかづら人にしられくるよしもがな

良暹法師

瀬をはやみ岩にせかるる滝川の
われても末に逢はむとぞ思ふ

源宗于朝臣

山さとはふゆぞ
さびしさ
まさりける
人めも草も
かれぬと思へば

文屋朝秀

たちかへる
風のふきし
秋はなを
つゆぬきとめぬ
玉はなりける

正三位家隆

風そよぐ
ならの
小川の
夕暮は
みそぎぞ夏の
しるしなりける

光孝天皇

君がため春の野に出て若菜つむ
我が衣手に雪は降りつつ

中納言兼輔

見わたせば
やまもとかすむ
のべのはる
月かすみ
ゆうべきて
とくらん
きりかくるらん

中納言行平

たちわかれ　いなばの
山の　峰に　おふる
まつとしきかば　今かへりこん

大納言公任
滝乃白糸
名社の
歌

素性法師

今来んと
いひしまま
に
長月の
有明の月を
待出つるかな

惠慶法師

坂上是則

夜ぶかく
月にこそ
すぐるふ
夢路のさとふ
ふれるたもと

藤原公

あふまでとても
いふなき人の
おもかた
月のいつ
はしに
なりぬへきかな

清少納言

元祐内裏頃
まつ海あくみ
おくだや
おらん初
春の
とまこ海とい世る
まつ巣ゆら元

大江千里

清原深養父

夏の夜は
まだ宵なれど
明けぬるを
雲のいづこに
月やどるらん

在原業平朝臣

ゑ早振神代も

きゝたまへ

竜田川

からくれ

なゐとくゝるとは

左京大夫敦雅
秋風にたなびく雲のたえまより
もれいでる月の影のさやけさ

順徳院

藤原敏行朝臣
住の江の
きしによる波
よるさへや
夢のかよひぢ
人目よくらん

以藤原興風
誰をかも
知る人にせん
高砂の
松も昔の
友ならぬ

貞信公

小倉山峰たもみぢ
ばあらしの
今一しきの
声聞くとき

参議篁
和田の原
十嶋うけく
こぎ出ぬと
人には告よ
あまの釣舟

俊恵法師
歌をよみがら
物思ふ比を
嘆くぞ
秋の夜は
つゆ
ねなりけるる

殷富門院大輔
みるからに
たとへまの
あやめ乃
袖ぞくちぬる
ぬきみだる
あやめ
ぬれしをもらじと

周防内侍

春の夜の
夢ばかりなる
手枕に
かひなく立つ
名こそ惜しけれ

三條院

蟬丸

さくらこの
ちりもゆくも
とりのれて
ゆくもしらぬも
あふさかの
せき

道園法師

おもひわび
さてもいのちは
みをつくし
てやなに
しあふさかの
せきもりとなれ
ける

大伴旅人卿
御うた守
海さはたく
只れ者も
とゝえうく
ひとは
きゝえつゝ
物とゝ者なし

参議雅経
みよしのの
山の秋風
さよふけて
ふるさと寒く
衣うつなり

藤原基俊
わたのはらこぎいでぬと人はみる
あまのつりぶねかへりくるかも

源重之

儀同三司母

忘れじの
ひさしかるべき
うらなれば
なほ恨みのこる
今ともかな

紀貫之

大伯皇子
歌きはしり
ぬる夜の
あくるまを
いかに久しき
あまとはは
なる

二條院讃岐

象袖をたに用
ひみつくはぬ
沖の石は
人こそ見
えぬかはくまもなし

皇太后宮大夫俊成
世の中よ
道こそなけ
れども
山の奥にも
鹿ぞなくなる

崇徳院

瀬をはやみ岩にせかるる滝川の
われても末にあはむとぞおもふ

和泉式部
あらざらむ
この世の
おもひでに
今一たびの
逢ひもがな

春道列樹

山川に風をあらしといふらんからくれなゐに水くくるとは

大納言經信

僧正遍昭

天つ風
雲の
かよ
ふ
ぢ
を
乙女
の
姿
しば
とゞめむ

法性寺入道前
冥白大政大臣

和田の原
こぎ出でぬと
人には告げよ
海人の釣舟

文屋康秀
吹からに秋の草木しなるれば
むべ山風をあらしといふらん

壬生忠見

皇太門院別當

難波江の
芦のかり寝
の一夜ゆへ
身をつくしてや
恋わたるべき

後徳大寺左大臣

ほとゝぎすなき
つるかたを
眺れハ
たゞありあけの
月ぞのこれる

西行法師
あけもやらぬ
月をながめて
なほふるる
かたちなるる
わかなをみて

能因法師

車兼盛

式部
めぐりあひて
しやそれ
とも分ぬまに
雲隠れにし
夜半の月かな

伊勢

難波がたみじ
かき芦の
ふしのまも
あはでこぐ
こしぬ世と
ゆめ

中納言敦忠

百人一首

四ヶ十本